

## 名古屋外国語大学副専攻語学の 現状分析と複言語教育の提案

大 岩 昌 子

西 川 真 子

### はじめに

個人の内部で複数の言語が共存することを目指す「複言語主義」という考え方が、世界の潮流となってきた。これは、社会の中で異種の言語が共存している「多言語主義」とは異なり、一つの社会圏内で異なる言語を母語とする人びとが母語の他に2つの言語を理解し、状況に応じて意思疎通ができるよう人材の育成に重点を置く。27カ国で23言語が公用語とされるEU圏内をはじめ、多様な母語話者が共存する地域で支持する声が高い。

一方、日本の外国語教育に視線を転じてみれば、今なお英語に過度に傾斜した状態がつづいている。すなわち英語以外の「学習指導要領」は存在せず、その他の外国語については、英語の目標及び内容等に準じて行うものとなっている<sup>1</sup>。また、小学校の英語教育が2011年度から正式に開始されるなど、国の言語教育政策は、英語が他を圧倒する形で進められている。しかし一方で既に複言語・複文化主義という複眼的視座が欠かせない時代に移りつつあることは否めない。例えば学生の就職活動の場に目を移すと、多くの企業から「一つの外国語が分かるだけでは物足りない」、「英語は出来て当たり前、他の語学の能力も求める」等のコメントが出されている。外国語教育に重点を置く大学は、こうした社会からの要求に対し如何に答えてゆけばよいのか。そうした教育機関の一つとして、名古屋外国

語大学（以下、名外大）では、如何なる目的を持って副専攻語学科目が設定されているか、この論稿を通じ確認したい。

論述に先立ち、名外大の副専攻語学の学習目標を知るために、以下を参照されたい<sup>ii</sup>。

グローバル化が加速する現代社会において、世界共通言語である英語はもちろん、ヨーロッパやアジア諸国、南米など、世界の主要エリアで通用する複数の言語の構造や発想の違いなどを比較することで、より深く理解することができ、広く国際社会で活躍する際の大きな強みとなります。名古屋外大では、複数の外国語を自在に使い分けるマルチリンガルをめざせるよう、各学科の専攻語学以外に、英語・フランス語・中国語・ドイツ語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・韓国語の8カ国語の副専攻語学・エリアランゲージズ科目を設定<sup>iii</sup>（以下省略、下線は稿者による）。

名外大外国語学部の副専攻語学では、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ポルトガル語、中国語、英語の中から1、2年次で継続して同一言語を選択、8単位が必修化されている。複言語主義の観点から見て、このカリキュラムには一定の評価を与えてよいだろう。外国語学部の中で最も学生数の多い英米語学科学生を例に取れば、専攻語学として英語を学び、副専攻語学として1つの言語を履修することで、複言語主義の理念を実現しているからである。中国語、フランス語学科学生の副専攻語学は英語の履修を原則とするが、2つの外国語を習得するという意味では同じである。さらに意欲の有る学生は3、4年次に引き続き既習の副専攻語学を履修すると同時に、第3外国語として他の言語を履修することもできるため、可能性はより広がる。

しかし、こうした「複数の外国語を自在に使いこなす」という目標は教員や学生に共有されているだろうか。また実際にその目標は達成されているのだろうか。今のところ、我々は、それを判断する尺度を持たない。なぜ

なら現在、本学には副専攻語学科目について全体を評価するシステムが存在していないからである。ほぼすべての副専攻語学の授業が非常勤講師によって担当されていることも問題のひとつと言えよう。現段階では、同一副専攻語学科目内はもとより、語学間で内容、問題点などを話し合う場は全くなく、学内で共有されている意識、事柄は皆無である。大学基準協会(2009)の「大学の内部質保証システム」のPDCAサイクルとは、目標・計画を立て(Plan)、実行し(Do)、結果を点検・評価し(Check)、改善・見直しを行う(Action)といったプロセスを意味している。すなわち授業に対する目標・計画を明確にし、それを構成員が共有し、その実現に向けて真摯な努力を重ねること、そして適切な評価によるフィードバックに基づいて目標・計画に修正を加え、確実に質の向上を図ることとされる。副専攻語学教育ではこうした作業がすべて各教員の裁量に任されており、全体として充分機能しているとは言い難い。

名外大の副専攻語学教育を名実相伴わせるには、副専攻語学内部の課題に加え、専攻語学と副専攻語学の関係について、学内で認識が共有できているかどうか今一度考えるべき時期にある。学生の学習時間は限られており、専攻語学の能力を高めるために副専攻語学に多くの時間を割くことは困難、或いは二つの言語を同時に履修すれば共倒れになりかねない等の意見は無視できない。専攻語学を第一におきながら、副専攻語学を「実用」のレベルに到達させるには、いかなる方法で何を目標にカリキュラムを考えれば良いのか、名外大の教育理念の根幹に関わる課題である。

こうした問題意識の上に立ち、本稿は、1. 他大学の言語教育の取組み例と名外大の副専攻語学の問題点、2. 名外大の副専攻語学の具体的教育内容、3. 副専攻語学の教育理念、目的、達成目標、方法などを検討することで、名外大の「副専攻語学教育システム」構築の方向性を考えることを目的とする。本来であれば、すべての副専攻語学科目での検討が必要であろうが、本稿ではまず学部内に専攻学科を有し主体的な対応が可能な、中国語、フランス語の副専攻語学科目(以下、副専攻中国語、副専攻フラ

ンス語)を検討対象とする。

名外大の副専攻語学の中で必須の8単位を取得するための授業時間は、合わせて180時間(1回90分間×120回)、3年次以降に選択履修する副専攻語学の上級を加えると合計で最大270時間(90分間×180回)となる<sup>iv</sup>。この授業時間内に名外大の副専攻語学としてどの言語を選んで、履修者が真に財産となり得る語学能力を身につけるよう、学習の目標と方法を共有する道を探りたい。小稿はその出発点に立つものである。

## I. 大学における最近の言語教育システム

最近では、「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment、以下 CEFR)」を具体的に参考とした言語教育の導入を始めている大学が見受けられる。その理由として、CEFRでは、学習者の熟達度のレベルをA1～C2のように具体的に記述するようになっており、こうしたチェック機能を用いれば、学習者の学習進度がいつでも測定できるようになるため、大学での英語教育の授業設定、評価システムなどに導入しやすいことが挙げられよう。

まず専攻科目ではない英語教育プログラム(所謂教養外国語としての英語)について事例を取り上げよう。日本で最初にCEFRを参考にして教養英語教育プログラムを開発するに至ったのは茨城大学であると言われるが、(1)ある学生が受ける週2回の授業それぞれに連動性がなく、レベルや進度に極端な差がある、(2)同じレベル設定の授業でも、評価基準が異なるため学生の到達度に差異が見られる、という2つ問題点が主な契機となっている(福田 2009)。大阪外大(現大阪大学)においても、「訳読が中心で、話すためには留学が必要」、「1年次より2年次の教科書が簡単であった」などという問題を払拭するために、CEFRの概念を取り込んできているという(真嶋 2010)。名城大学でも、CEFRに基づいて設計されたシステムで全学共通教育英語プログラムが統一されている(只木 2010)。名

古屋大学では、平成21年度から全学教育に英語新カリキュラムを導入している(長畑 2009)。そこでは、①「世界に通用する尺度」の導入、②「積み上げ方式」による英語教育、③ 英語力の底上げ及び最低限の出口保証、④ 成績上位者のより高いレベルへの誘導、⑤ 英語による学術論文の読解・執筆・発表の能力の育成をはかることがうたわれ、それらの実現のために、① 検定試験の一斉受験、② 1年前期の習熟度別クラス編成、③ eラーニング教材を用いた課外学習による学習量の増加、④ パラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーションを中心とする授業の実践が行われることが示されている。

さて名外大に目を移すと、副専攻英語を受講するのは、中国語学科、フランス語学科生である。先の茨城大学と同様、ある学生が受ける週2回の授業それぞれに連動性がないこと、同じレベル設定の授業でも学生の習熟度にバラツキがある、評価基準が異なるため学生の到達度に差異が見られるなど、問題点は数多い。2012年度からようやく、2年次より習熟度別教育を導入したものの、1年次からの導入は難しく、相変わらず様々なレベルの履修生が同一クラスに存在する。教員側から見れば、教材選びや授業での学生対応に負担が大きいことが推測される。中国語、フランス語を専攻する学生は、それぞれの専攻語学が初修言語ということで、多大な勉強時間を割く必要があるとはいえ、やはり、1年次から4年次に向けて英語力の進歩がほとんど窺えないことは重大な問題として捉えなくてはならない。名外大の学生であれば、たとえ副専攻であっても、英語力の質保証は意識したい。

一方、CEFRは母語話者を理想のモデルとしたものではないことから、英語以外の外国語教育の評価にも利用できる。国士舘大学では2009年4月に、5学部の外国語教育カリキュラムに含まれる英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語、ロシア語、留学生対象日本語の8言語を包括する『外国語ポートフォリオ』と共通参照レベルに相当する「外国語学習の到達レベル」が導入されている(鷲巣 2009)。さらに、大阪外

国語大学（現大阪大学）では、例えば中国語の上級とヒンディー語の上級の授業の中身は同じなのかどうか比較ができないということでCEFRの導入に行き着いたとされる（真嶋 2010）。

一方、名外大のシラバスによると、副専攻中国語、フランス語およびポルトガル語では統一教科書が使用されているが、英語、スペイン語、ドイツ語に関しては担当教員の裁量に任されている。となれば、自ずとクラスごとに授業目標、レベル、進度、評価方法にバラツキが生じるはずであり、その教育的効果はどの程度なのか、客観的に判断するのは難しい。必ずしもCEFRでなくてもいいが、同一言語内、言語間の担当教員の間での共通認識を持つことが最優先課題と考える。

## Ⅱ. 本学部の副専攻語学教育の具体例

何らかの基準に基づいて、名外大の副専攻語学について、同一言語内、及び異なる言語間の授業担当教員が授業の達成目標について認識を共有するには、どうすれば良いのか。この課題を念頭に、本章では、現在使用中の教科書を具体的に調査することで、中国語およびフランス語の副専攻語学教育の現状を把握する。また、併せて副専攻語学に対する学生の履修動機を検証することにより、より良い授業内容を導くための一つの材料としたい。

### 1. 副専攻語学の履修方法

本学外国語学部英米語学科並びに英語教育学科の学生は入学時に、副専攻語学として、中国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ポルトガル語の中から履修する言語を選ぶ。副専攻語学の授業はすべて1年生で初級、2年生で中級の授業をそれぞれ週2回ずつ通年で履修する。それらの授業は、1年Ⅰ期に初級A1と同B1、1年Ⅱ期に初級A2と同B2、2年Ⅰ期には中級A3と同B3、2年Ⅱ期に中級A4と同B4が必須科目として割り当てられている。さらに3年生以上に対しては、選択科目として、副専攻中国

語上級 A-5・6、B-5・6、C-5・6（中国語のみ）が開講されている。2012年度の副専攻語学の全履修者数は文末に付した【別表】のとおりである。

名外大で副専攻中国語並びに副専攻フランス語の履修者は、外国語学部英米語学科並びに英語教育学科の学生がその大半を占める。中国語に関しては2012年度Ⅱ期には初級、中級ともそれぞれ約190名が10クラスに分かれて履修している。上級はAとBが各2クラス、Cには1クラスを開講している。担当教員は初級6名、中級は10名である。初級クラスは2クラスを除いて、初級AとBを1人の教員が受け持ち、中級はすべてのクラスでAとBの授業をそれぞれ別の教員が受け持つため、このような数字となっている。上級の授業はA、B、Cをそれぞれ別の教員が受け持っている。よって副専攻中国語初級、中級、上級のすべてのクラスの担当者は合計で14名になるが、其中で専任教員は中級A1クラスを教える1名のみである。これらの数字はここ数年多少の異同を含みつつ、ほぼ同等の値を示している。

フランス語に関しては、2012年度Ⅱ期には初級、中級ともそれぞれ約80名が5クラスに分かれて履修している。授業を担当する教員は初級6名、中級は4名である。初級、中級ともAとBの授業をそれぞれ別の教員が担当している。また、初級から上級のすべてのクラスの担当者はのべ11名であるが、其中で専任教員は2名（日本人とフランス人各1名）であり、初級Bの3コマおよび上級1コマを担当している。

## 2. 副専攻中国語

### 1) 履修の動機

日本の産業界では、多くの企業が中国語を理解する人材に関心を示している。これは大学生が在学中に中国語を学ぼうとする強い動機となって現れており、本学の副専攻中国語の履修者も多くがその影響を受けている。主専攻として英語を学びつつ中国語を身につけたいという学生の声を読み

解くと、彼らが副専攻中国語を選択した理由として、およそ以下の4つが想定される。

- ①中国語会話をマスターしたい。
- ②将来のキャリア形成に役立てたい。
- ③中国の文化や社会に関心が有る。
- ④中国語検定試験を受験し資格を取得したい。

この4項目は明確に区別されるものではない。むしろ相互に接点を共有しつつ副専攻中国語の履修目的として意識されていると考えられる。

## 2) 授業と教科書

初級中国語の教科書は、初級Aと初級Bの2科目で共に竹島金吾監修、尹景春・竹島毅著『中国語はじめの一步』(白水社)(以下、『はじめの一步』)<sup>v</sup>を使用している。このテキストは大学で初めて中国語を学ぶ学生が週1回の授業を1年間履修して学習するように編集されている。一方、本学では、副専攻中国語初級Aと同Bは、原則として同じ教員が授業を担当し、週2回の授業で連続して1冊のテキストを学習している。これは、週2回の授業を連続させ、履修者が教科書の本文と例文をできるかぎり暗誦し、単語や表現を繰り返し練習し自由に使いこなすために有効な方法と考えていることによる。だが、単語や本文の復習に十分時間を取った場合でも、Ⅱ期の後半にはテキストを学習し終わってしまう。そのため11月末以降には、新たに別のテキスト『2年生のコミュニケーション中国語』(白水社、以下『2年生の中国語』)<sup>vi</sup>の学習に移る。

副専攻中国語初級の授業時間の大半を使って学ぶ『はじめの一步』は次のように編集されている。まず本書は、巻頭の「ウォーミングアップ」、「発音」、本文全12課のほかに、自己紹介の例文、テキストで使われている単語リストから成り立っている。各課は本文に加えて、新出単語、文法事項の説明、練習問題、及び本文に関係する中国事情を紹介する短いコラム

「ひと口メモ」によって構成される。

各課の本文は、日本の大学に学ぶ女子大学生・林と中国人留学生・張が大学生活のさまざまな場面で会話をする形式を取っている。その中で各課には【資料1】のように基礎的な文法項目が割り当てられ、本文及び例文を通じてその内容を学習する。

【資料1】『はじめの一步』の各課で学ぶ文法項目

第1課：人称代名詞 “是”の文

第2課：指示代名詞（1） 疑問詞疑問文 “的”の用法（1） 副詞

第3課：動詞の文 「所有」を表す“有” 省略疑問の“呢”

第4課：量詞 指示代名詞（2） 形容詞の文 “几”と“多少”

第5課：数字 日付・時刻を表す語 「動作の時点」を言う表現

第6課：「完了」を表す“了” 「所在」を表す“在”

助動詞（1）“想”

第7課：介詞（1）“在”，“离”

第8課：「時間量」を表す語 助動詞（2）“得” 介詞（2）“从”

第9課：「過去の経験」を表す“过” “是～的”の文

介詞除（3）“跟”，“给”

第10課：助動詞（3）“能”，“会” 「動作の様態」を言う表現

動詞のかさね型

第11課：「動作の進行」を表す“在～呢” 「～しに来る，しに行く」

の表し方 選択疑問の“还是”

第12課：「比較」の表現 “的”の用法（2）

2つの目的語をとる動詞 目的語が主述句のとき<sup>vii</sup>

3) 履修の動機と授業内容

先にも述べたように、副専攻中国語の履修者は、①中国語の会話能力を習得したい、②将来のキャリア形成に役立てる、③中国文化に関心が有る、

④各種中国語検定試験の資格を得るため等を理由に同科目を選択したと考えられる。履修者は本学副専攻中国語の授業を履修した結果、上述の学習目標をどの程度達成できるのか。以下に副専攻中国語初級の状況を、テキストの内容分析を通じて考えたい。

#### ①中国語日常会話の習得

『はじめの一步』は主として大学で週1回1年間の授業を受けて中国語を学ぶためのテキストである。学習者を大学生と設定しているため、その巻頭にも「語彙・表現を学生生活に密着したものに絞り、活用度の高い内容をごく短いセンテンスで表している」と説明がある。テキスト全体は、日本人女子学生・林と、西安出身の中国人留学生・張の二人が大学生活の中でかわす会話によって構成されている。すなわち、自己紹介、大学生活に必要な持ち物、授業やサークル活動、アルバイト、学生食堂での食事、夏休みの旅行、学生のパーティ、趣味などの話題が順次取り上げられるが、家庭内の会話、病院や銀行、商店など大学以外の場面を想定した会話はほとんど含まれない。

#### ②キャリア開始後の実用性

大学卒業後、就職し実社会で業務に当たる中で中国語を役立てるとするならば、会話がなされる場面は、企業や商店、公共施設等を想定しなければならない。一方、名外大の副専攻中国語履修者のほとんどは大学1、2年生であり、授業の中で本格的なビジネス会話に重点を置いて学習するには無理がある。また、初めて外国語を学ぶなら、使用頻度の高い生活に密着した語彙・表現の習得から始めるのが自然でもある。だが、将来のキャリア形成に資すことを念頭に学習するならば、学習の進度に沿ってビジネスの現場との関わりを意識した項目が含まれてもよい。

『はじめの一步』の中で、実社会でそのまま活用できる内容は、第1章並びに第5章：初対面の人への挨拶と簡単な自己紹介、第4章：買い物の際

の値段の尋ね方、第5章：日付・時刻の言い方等である。

実際の場面で役立つ実用性を高めるために、『はじめの一步』では、本文の全12章が終わった後で、補充材料として「自己紹介」が載せられている。これは約100語の中国語で日本の大学の経済学部で学ぶ19歳の日本人女子学生がクラスメートに自己紹介をおこなう、という設定で構成されている。文中には、話し手の家族構成、実家が大阪にあること、中国語学び始めて1年目で、スポーツが得意なことが語られ、大学生の自己紹介ではあるが、社会人が仕事上で知り合った初対面の相手にも応用できる内容となっている。

### ③中国文化への興味

『はじめの一步』は、日本の女子学生と中国人留学生が展開する大学内の日常会話が中心で、中国文化の理解につながる内容は僅かしかない。その中で、限られた中国文化へのアプローチとして第一に、『はじめの一步』の巻頭には、「ウォーミングアップ」と名付けられた、中国の概況と中国語の特色を説明する単元が設けられている。ただ、その内容は第1節「中国とは、どんな国？」に、中国の正式名称、建国年月日、面積、人口、社会体制、行政区分、首都、民族、主要言語、通貨について箇条書きで記し、その下に日本と中国の歴史を理解するための略年表が付されるのみである。

第二の工夫として、各課の初めに、「ひと口メモ」として約250字で、本文の内容と関連させて、中国の事情を知るためのコラムが設けられている。話題は、中国人の姓、中国の大学のしくみ、都会のショッピング街、アルバイト事情、食習慣、女性の地位、大学生の娯楽、北京の名物料理と観光地などとされている。どの課のコラムも日本語で書かれているが、文中に関連する中国語の表現が差し挟んであり、中国の現状を知るには役に立つ。しかし本文の中で、多少なりとも中国の伝統に触れるものは、第6課（食文化にまつわる言い回し）第9課（杭州、蘇州、桂林など中国の観光地の中国語表記を紹介）、第10課（中国のお酒にちなんだ語彙の紹介）、

第12課(北京の観光地と名物の中国語表記の紹介)のみである。これらを糸口に、教員が中国文化について紹介を加えることは可能であるが、中国文化への理解を深めることは、この教材の主旨ではない。

【資料2】『はじめの一步』本文中に取り上げられる中国文化の関連事項

第6課 中国料理の名称

第11課 『三国志演義』

第12課 北京、上海、西安の地名 北京の地図<sup>viii</sup>

#### ④中国語検定試験の受験と資格の取得

現在日本で実施されている中国語の語学資格試験の中で受験者数が多いのは、「中国語検定試験」(日本中国語検定協会主催 以下、「中国語検定」)、「漢語水平考試(HSK)」(国家漢語辦公室主催)の二つである。本学では、「中国語検定」に関し、毎年3月に実施される当該年度の第3回試験の受験を推奨し受験費用を大学が負担している。そのため、副専攻中国語初級の履修者の中で3月に同検定を受験する者は少なくない。「中国語検定」の出題難易度と試験合格の基準となる学習時間から考えると、本学の副専攻中国語初級の履修者は、同検定4級の合格を目指し得るが、実際に4級を受験し合格するのは副専攻中国語中級の履修を終えた2年生以上の学生が大半を占める。これには上述のように、本学の副専攻中国語初級の授業は4級合格の為に必要な文法事項を未習のまま終了してしまうという事情が影響している。

日本中国語検定協会の受験案内によれば、中国語検定試験は準4級から1級まで6段階に分かれ、各級とも年に3回試験が実施されている(1級は年1回のみ)。同検定4級試験は以下の指針に沿って実施される。

【資料3】

◇中国語検定試験4級 認定基準

中国語の基礎をマスター

平易な中国語を聞き、話すことができること。

学習時間 120～200時間。(一般大学の第二外国語における第一年度履修程度)

単語の意味、漢字のピンイン(表音ローマ字)への表記がえ、

常用語500～1,000による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳。<sup>ix</sup>

【資料3】に示した中国語検定4級の認定基準と出題内容を念頭に『はじめの一步』を一覧すると、同書を用いた授業はそのまま同検定4級受験の準備に役立つが、本学の副専攻初級を履修しただけでは4級合格に必要な項目の中の幾つかが未習のままとなる。

中国語検定4級の試験問題は、リスニングと筆記に分けられ、それぞれ60点以上を取得すれば合格となる。リスニングは大きく2問に分けて出題されている。その中には、2011年6月に実施された第74回中国語検定試験4級リスニング問題1(5)のように、「わたしは王と申します。あなたのお名前は(我姓王、您贵姓)?」という質問を聞き取って、相応しい答えを選ぶという問題のように、『はじめの一步』の中で学習する内容とほとんど同一の問題も出されている。その一方で、同じく問1(8)は、「あなたはどこで働いていますか?(你在哪儿工作?)」という問に対しては、『はじめの一步』には「工作」という語は取り上げられておらず、本学の副専攻中国語の履修者は初級を終了した段階では、この問題に正しく解答するのは難しい。

筆記問題に関しても課題は少なくない。まず単語・語彙力に関して、4級の試験問題に使用される単語の中で、『はじめの一步』では学習できない単語・語彙は多数に上る。例えば第74回4級の筆記問題問1の(1)～(5)は、各問ごとに5つの単語を並べ、その中から他の4つとは声調の組み合わせが違う単語1つを選ぶ問題になっている。同設問に使われている

単語20の中で次の12の単語、すなわち「①国家、②文化、③城市 ④決定 ⑤友好、⑥古典、⑦漂亮 ⑧头发、⑨钢笔、⑩汽车、⑪行李、⑫经理」は、『はじめの一步』の中には登場しない。これら12の単語の中で①～⑦は語彙の抽象性が比較的高く、残りの5つの単語、並びに上述の「工作」は大学1年生のキャンパス内の日常とは関わりの低い語で、『はじめの一步』の本文に取り入れるのは難しかったと考えられる。

なお作文問題に関しては、第74回4級試験の第5問には、【資料4】に示す5つの日本語を中国語に翻訳する問題が出題されたが、これらの問題を解くのに必要な単語はすべて『中国語はじめの一步』に取り入れられている。

#### 【資料4】

- (1) このバスは動物園に行きますか。
- (2) わたしは友人にプレゼントをあげます。
- (3) 彼女は中国語の辞書を1冊借りました。
- (4) ここはあそこほどにぎやかではありません。
- (5) あなたたちの学校の図書館は大きいですか？\*

つまり、文法に関しては、『はじめの一步』及び『2年生の中国語』第2課までを学習すると、検定中国語4級の問題を解くのに必要な文法事項はかなりの程度カバーできる。だが、【資料1】に示したように、『はじめの一步』には、中国語検定4級に出題される、処置式文、使役文、存現文は取り上げられていない。『はじめの一步』終了後に学ぶ『2年生の中国語』の第1～2課の中にも処置式文、使役文、存現文の説明は含まれない。これに対して、第74回4級試験筆記問題3の(2)には、「父は兄にビールを飲ませません」という日本語に合うように、指定された中国語の単語を正しく並べる問題が出題されている。この問題を解くには、中国語で使役文を書く時に必要な「让」という語の用法を理解していなければならない

が、本学の副専攻中国語初級の履修者には使役文を未習のまま4級を受験することになる。

同様に、第74回4級試験筆記問題3(10)は、「昨日私の家にお客さんがいらっしゃいました」という文章を中国語に訳す問題である。同問は存現文の用法を理解していなければ回答できないが、『はじめの一步』では、存現文も学習項目には含まれない。

加えて、『はじめの一步』の本文並びに例文は、すべて単文で構成されている。よって『はじめの一步』には「天气が良くないので、わたしは傘を持って行く」(因为天气不好, 所以我带雨伞去)、「仕事は忙しいが、毎日頑張って中国語を勉強する」(虽然我工作很忙, 但是每天坚持学汉语)など、複文を構成する際に使用頻度の高いイデオムも取り上げられていない。「因为～所以～」については、『2年生の中国語』第1課に取り上げられているが、これと同様に使用頻度が高い「虽然～但是～」(～ではあるが、しかし…)という複文イデオムは、『2年生の中国語』にも取り上げられていない。

つまり、中国語検定4級の受験者は、授業に頼らず他の方法で使役文、存現文、「因为～所以～」「虽然～但是～」等の複文イデオムを理解しなければならない。

2年次の副専攻中国語中級では、中級Aで『中国語への道—浅きより深きへ— 準中級編』(金星堂、以下『中国語への道』)<sup>xi</sup>を教科書とし、中級Bは『2年生の中国語』第3課からスタートする。既に1年時から使用している『2年生の中国語』は、旅行で北京を訪れた日本人が現地で観光、食事、ショッピングを楽しみ、交通機関、郵便局、病院等を利用する時に用いられる会話を学ぶという形式を取る。『中国語への道』には、中国の社会習慣、若者の結婚観や就職事情などをテーマに各課に会話文と100字余りのエッセイが配されており、履修者は授業を通じて中国の事情を理解できるように設定されている。これらの内容をすべて理解できれば、履修者は中国語の日常会話を習得することは十分可能で、中国語検定試験3級

取得にも対応できる。だが、副専攻の語学能力を卒業後のキャリア形成に活かしたいと願うならば、3年次以降も継続して語学能力の維持向上を目指すより他はない。中級修了時点で学習を停止すれば、履修者にとって副専攻語学の授業は「単位を取得した」という以外、意味を見出し難い。現在、副専攻中国語上級の授業について、上級A並びにBは中級の延長上に会話と読解を中心とする授業を実施し、上級Cは中国語検定の取得を目指す履修者の為に開講しているが、中級修了後に上級を履修する学生数は半減する。この数字は当該科目の設定を、履修者の専攻学科の必須科目との関係も含めて再考すべきことを物語っている。

### 3. 副専攻フランス語

#### 1) 授業と教科書

フランス語副専攻語学科目も名外大の副専攻語学の履修規定に則して開講されており、受講生は、初級（1年次）、中級（2年次）とも文法・講読を中心とする授業A、会話・作文を中心とする授業Bを1セットとして履修する。すなわち、合わせて週2コマの授業を2年間、必修科目として受講することとなる。現在、初級では『パラレル』（白水社、2011）、中級では『アミカルマン・ビス』（駿河台出版社、2004）が統一教科書として採用されている。

初級教科書『パラレル』の内容を紹介する前に、その作成経緯を説明しておく。以前教科書選択は1年次A・B、2年次A・Bの各担当教員の裁量に任せていたため、開講コマ数だけの教科書が採用されていた。しかし、中級への進級時での学習進度やレベルの違いが顕在化したこと、週1コマ、1年間の授業で教科書を一冊修了させることがほぼ不可能との指摘を受けたことから、2005年度にはカリキュラムを縦割りとし、1、2年次Aの授業で1冊<sup>xii</sup>、1、2年次Bの授業で別の1冊<sup>xiii</sup>を統一教科書として採用することとした。こうして教科書によるバラツキは解消されたはずであったが、Aの授業では日本、Bの授業ではフランスにて制作された教科書が導

入されたため、両者の文法事項の進捗にかなりの隔たりがあり履修者に効果的ではないなどの意見が出され、2年後には更なる見直しを迫られることとなった。ここで学科内から、A・B両方の授業で同時に使用できる教科書を担当者で作成する、という提案が持ち上がり、まずは初級用の教科書作成を目指すことが決まった。2007年から月1回程度を目安に内容検討が始められ、2009年には第1パイロット版『レベテ』が、2010年には同名の第2パイロット版が作成された。これらを実際の授業で使用、その中で発見された問題点や学生の意見などを参考にさらに協議が重ねられ、会話内容、練習問題の形式なども大幅に改定されていった。そして発案から4年後の2011年、初級の統一教科書『パラレル』として上梓された。こうした経緯をたどり作成された『パラレル』は、以下のような内容となっている。

#### ① 構成

巻頭の発音説明、本文12課からなる。1課はほぼ6ページに統制され、「文法項目の説明」およびその確認問題が5問前後、「単音・文の発音練習」（ここまでAの授業）、先の文法事項を取り入れた「会話文」および口頭練習の設問が3問程度、「すぐに役立つフランス語表現」、「文化コラム」、「語彙リスト」（ここまでBの授業）から構成される。本教科書での使用単語数は約900語であり、その中にはフランス語の最重要単語とされる約550語（白水社発行の辞書『ル・ディコ』）が含まれる。数字、曜日、月名、季節、時刻、頻度表現は別枠で説明される。

#### ② 網羅される文法事項

同教科書で説明される文法事項は、名詞、名詞の性、冠詞（3種類）、縮約冠詞、疑問形（3種類）、否定形、主語人称代名詞、人称代名詞強勢形、補語人称代名詞、副詞的代名詞、中性代名詞、疑問代名詞、形容詞、指示形容詞、所有形容詞、疑問形容詞、疑問副詞、非人称構文、動詞は直説法（現在、複合過去）、近接未来、近接過去、命令法、代名動詞である。これらの文法事項は大学の副専攻語学教育で使用される一般的な教科書で扱わ

れるそれと大差ないが、動詞活用の進度が比較的遅いのが特徴である。

### ③ 文化コラム

コラムはすべて、その課でなされる会話内容と関連するテーマが設定されている。例を挙げると、「主人公がパリの街を見学する」という課では、「観光名所のフランス史」が話題として取り上げられている。他には、「西洋の驚異」、「チーズのはなし」、「フランスにおける哲学教育」、「シャンソン」などがあり、それぞれ各分野の専門家が執筆している。こうしたフランスに特徴的な文化的要素に少しでも触れることで、学習の動機づけが高まると期待される。

## 2) 学習の動機と授業内容

『パラレル』はその編集に際し、副専攻フランス語の一般的な学習動機やレベルを確認しながら、さらに名外大の履修者のニーズを意識して全体の構想を練り上げてきた。ここでは副専攻中国語の考察に準じ、以下の如く主に4つの学習動機の観点から、教科書と授業内容の関係を明らかにしつつ検討を進める。

### ① 旅行会話の習得

毎年、履修学生の約8割は、現地でフランス語を使った会話を楽しみたいといった動機で履修を決めている。そのため『パラレル』では、主人公で、パリのホテルで働く日本人青年がパリや地方を巡る中で旅行に必要な表現を自然な形で用いるよう配置し、履修者がフランスを旅行した際、会話集としても使えるようになっている。また主人公の働くホテルが舞台となる場面では、チェックインの方法や、レストランでの注文の仕方などにも表現を広げており、旅行中の会話であれば十分対応できる内容が盛り込まれている。「すぐに使える表現」では、「依頼」、「許可」、「希望」、「謝罪」、「感謝」などの機能を担う表現も、文の形で紹介しているとともに、応用力をつける目的でその練習問題も課している。ただ、現実の意味内容

を伴う文脈が与えられない授業のみで会話を学ぶことの限界は認めざるを得ない。

## ② キャリア形成への興味

目下一般的に、キャリア形成への効果を直接の動機として大学でフランス語を履修する学生は多くない。よって、履修者の共感を得易くするために市販される多くの教科書では主人公を学生に設定することが多い。しかし『パラレル』では、あえて卒業したばかりの日本人ビジネスマンを主人公に設定している。そして彼がフランスにある日系ホテルに転勤することとなり、フランス語を日常的に使うという状況になる場面を想定している。これは、仕事でフランス語を使うという実感を履修者に与え、こうした社会的要求に応えることの可能性を自らの中に持つことで、よりフランス語学習の動機づけを高めることを、『パラレル』編集の一つのねらいとしたからである。「ホテルのチェックイン業務をする」、「同僚との自己紹介および家族の紹介をする」、「同僚とバカンスの予定やその内容について話す」、「ホテルの利用客を増やすための戦略会議をする」、「仕事上のトラブルを解消する」、など、語彙的・文法的限定条件はあるものの、十分に具体的なやり取りがなされる場面が、将来のキャリアを意識できるような刺激材料となることが期待される。ただ、実社会では教科書では想定され得ない様々なコミュニケーションが当然あるはずであり、そこまで網羅しているとは言い難い。こうした応用力をどう涵養するか、この点は初級授業ではなく、中級、上級授業の役割に譲らなければならない。

## ③ フランス文化への興味

受講生の約半数はこの動機に副専攻フランス語を履修している。また、履修者が英語を専門とする学生ということで、フランス語圏であるカナダを意識して受講するという場合も少なくない。日本の高校生が大学入学前に触れるフランス（語圏）文化は限定的であるものの、歴史、美術、教会

建築、音楽、文学、食文化など、興味としてはかなり広範囲に及ぶ。これを受け、『パラレル』では文化に関わるコラムを入れることとした。歴史、教会などに関わるテーマとして、「フランス観光名所の歴史」、「西洋の驚異-モン・サン・ミッシェル」、「フランスのクリスマス」、食文化関係として「チーズのはなし」、文学関係として「フランスにおける哲学教育」、音楽関係として「シャンソン」などを取り挙げている。これらをどう扱うかは会話の担当教員に任されている。ちなみに、会話の場面でも、「観光名所を訪ねる」、「語学学校での自己紹介」、「友人を週末に誘う」、「友人とレストランで食事」、「クリスマス休暇の過ごし方」など、フランス文化が垣間見えるように工夫がなされている。さらに、主人公を取り巻く登場人物には、実際のフランスに多く見られる、ベトナム系フランス人、スペイン人、アメリカ人、中国人観光客などが含まれており、複文化状態を醸し出すこうした場面から、ややもすると「フランス人」しか存在しないと誤解されがちなフランスの現状が透けて見えるようになっている。練習問題には歴史を感じる建造物や歴史的人物名も散見される。

#### ④ フランス語検定試験の受験と資格の取得

検定試験としては主に、実用フランス語技能検定試験（以下仏検）が想定される。仏検は通常、春季が6月、秋季が11月の年2回実施される。もともと資格取得の動機を持つ学生は多くはないが、学習を進めるうちに単位互換制度も後押しし、検定試験に関心を抱くようになる学生は少なくなっている。フランス語の専攻生以外に対しては、フランス語検定試験4級合格で2単位、3級合格で4単位、準2級合格で6単位を取得できるようになっている。ここで各級のレベルを見る<sup>xiv</sup>。

4級：筆記および聞き取りのみ

基礎的な日常的フランス語を理解し、読み、聞き、書くことができる。

標準学習時間：100時間以上（大学で週1回の授業なら2年間、週2回の

授業なら1年間の学習に相当。高校生も対象となる。)

語彙：920語

3級：筆記および聞き取りのみ

程度：フランス語の文構成についての基本的な学習を一通り終了し、簡単な日常表現を理解し、読み、聞き、話し、書くことができる。

標準学習時間：200時間以上（大学で、第一外国語としての授業なら1年間、第二外国語として週2回の授業なら2年間の学習に相当。一部高校生も対象となる。)

語彙：1,670語

4級について言えば、『パラレル』で網羅する文法、語彙をしっかりと習得すれば、十分対応可能である。出題範囲とされる動詞の直接法半過去、単純未来の活用形が同教科書では網羅されていないため、1年次修了時に受験することを躊躇う履修生は少なくないであろう。ただし、今回(2012年11月)の試験問題を見る限り、半過去、単純未来の活用形に通じなければ解けない問題は数問に限られるため、未習段階でも合格点を得ることに問題はない。3級に関しては、筆記問題、聞き取り問題の両方に、フランス語を書き込む問題がある。例えば、短い定型文の空欄補充問題(選択肢有り)、動詞の活用形の空欄補充問題(不定詞が提示されを適切に活用させる)、語彙の空欄補充問題(選択肢有り)、聞き取り問題では、会話の中のフランス語を一部書き取る問題等が見受けられる。発音と綴りが一致を見ない点がフランス語の特徴の1つであり、そこに困難を覚える学習者も多い。こうした「筆記問題」に対応するには、1年次から正確に書くという意識をもたせることが肝心である。ちなみに、2年次で統一教科書として使用する『アミカルマン・ビス』では、3級の文法事項をすべてカバーできる。担当者によれば文法事項はI期に修了することも可能である。『パラレル』との大きな違いとして文化面もフランス語で書かれており、長文読

解のテキストとしても使用できる。こうしてみると、1年次が修了した5月の段階で4級、2年次の11月に3級を受験することを目標とするのが無理のないスケジュールと定めてもよさそうである。

#### 4. 浮かび上がってくる課題——副専攻語学の現状

同じ副専攻語学の中に位置づけられているが、中国語とフランス語はそれぞれ異なる履修動機に向き合い、異なる授業展開がなされている。

中国語に関して言えば、初級中国語の教科書『はじめの一步』は良質なテキストで、副専攻中国語を学ぶ大学生が日常生活の中で無理なく理解でき、身近に中国の知人がいれば、授業で学んだことをすぐさま役立てられる内容を備えている。ただし、「中国語を将来キャリア形成に役立てたい」「中国語検定4級を取得した」「中国文化に親しみたい」という期待に沿うには、今後何らかの対応を要すると明らかになった。筆者自身、今回小稿を書く中でこの知見を得たものであり、今まで断片的な理解の上に「何か問題が存在している」と経験的に感知するにとどまっていた。

フランス語に関しては、早い段階で課題を意識し履修者の学習動機を考慮して統一教科書『パラレル』を編集、副専攻語学の現実に対応している。ただし、同教科書が学生のレベルや現在の授業体制と完全に合致し、十分に機能しているとは未だ言い難い。例えば、実社会の職場で使用される実用表現を追求するあまり、高いレベルの会話が構成されることとなり、初級者には実用的でないという皮肉な結果を生んでいる。文法的な観点から見ても、動詞の活用形を複合過去までとかなり絞り込んでいるものの、使いこなすレベルにまでは到達しない。語彙の面から言えば、本教科書での使用単語数は約900語、その中には最重要単語550語がほぼ含まれているため、日常会話には事欠かない程度にはなれるはずだが、現状では1年次修了時に語彙が十分に記憶されているとは言い難い。2年次の担当教員からは、その忘却率は目を覆うばかりとの指摘もなされる。外国語学習に最も重要な能力のひとつは「記憶力」であるが、語彙や文法知識にざっと目を

通すだけでは通常長期記憶に留まることは期待できない。長期記憶に留めるには、語彙や文法知識を意味のある文脈の中で使用することや、学習者自身何度も繰り返す(リハーサル)ことが不可欠であろう。そうすることで「実用」レベルへと導かれるものだが、現在の授業体制ではここまで徹底的な実用を目指す方策が取られておらず、実用の場を積極的に提供するという試みもない。こうした現状は長年副専攻語学教育の問題として議論されてきた点であり、教科書を作成しただけでは払拭できない課題と言わざるを得ない。一方、2年次用の教科書『アミカルマン・ビス』は名外大で作成したものではないため、『パラレル』とは厳密な対応がなされていない。副専攻フランス語の充実を目指すには、『パラレル』の進捗や目標などに準じた中級用教科書の作成が望まれる。更なる問題として、上級授業の履修者が極端に少ないという点を挙げておきたい。上級授業を履修する学生は中級履修者の約6%に留まっており、必修科目ではないことを斟酌しても見過ごすことはできない。外国語学習の効果は、動機づけや学習方法とともに、学習時間数によっても大きく変動する。副専攻の質保証はこの3年目の履修者数を増やせるかどうかにかかっていると看做しても過言ではないだろう。

### Ⅲ. 提案——副専攻語学教育システムの構築

日本の若者の視点は内向きになっていると言われるが、名外大の学生は海外や外国語に関心が高い。これを裏付けるように、「せっかく副専攻語学を履修するのであれば、しっかり身につけたい」という学生は少なくない。単位取得のためにしかたなく学ぶ、という学生はむしろ少数派であろう。しかし、残念ながら学習が進むにつれて、「こんなに難しいとは思ってもいなかった」、「単位さえ取得できればいい」、「なんと言っても英語が重要だから、やはり英語に力を入れたい」、という声が聞こえるようになる。何故こうした事態が生じるのかを考える時、ある研究報告が示唆に富む視点を与えてくれる。すなわち、最近の学生の英語能力が低下しており、現

行の大学英語教育が学生のレベルに合わなくなっているという指摘は注目に値する(小田井 2010)。これは、中等教育での英語の時間の削減、英語教育の会話重視への大幅なシフトにより、コミュニケーション能力重視と称して文法的な理解をおろそかにしてきた結果、大きな付けが回ってきたものと考えられている。そして、大学入学前の英語学習の経験が量質ともに乏しくなったことが、大学における副専攻語学の学習にも影響を及ぼしている。これは、副専攻語学の授業で成果を挙げられない学生の大半が「言語をどう学べば良いか学習方法が分からない」、「言語学習に割く時間が極端に短い」という事態に陥っているという事実の中に顕著にみと取れる。

多くの学生が大学入学時には副専攻語学を「実用」レベルまでマスターしたいと抱負を抱きながら、この目標を達成できない。この事実、取りも直さず外国語教育を専門とする名外大が取り組むべき命題だと言えよう。

反面、言語学習に習熟しているとは言い難いものの、外国や外国語には本来強い興味を持ち学習意欲も高い名外大の学生にとって、大学在籍中に副専攻語学を確実に習得する意義もまた、改めて繰り返すまでもない。

限られた時間内に「実用」レベルの語学能力を身につけるには、授業方法と設定目標を明確に意識しなければならない。これまで具体的な目標を定めずに取り組んできた我々教員、そして語学の習得方法に未熟な学生がともに意識の転換を迫られよう。しかし、それがひいてはこのグローバル時代に不可欠な多様性への意識や教養を身につける最も効果的な方策となるろう。

この目標を達成するために、全ての副専攻語学に共通する問題として、以下を論点としたい。

① 名外大の副専攻語学(英語も含む)の統一目標を、各レベルでどう設定するか。その際、検定試験、CEFRの導入、あるいは独自の尺度の開発の可能性を探る。各学習レベルの学生がそれぞれの達成感を得られ、尚且つ対外的にも「名外大の副専攻語学はどの言語を学習しても質の保証がなされている」とアピール可能な形を検討する。

- ② 本稿では中国語、フランス語の教科書を分析したが、他の副専攻語学で使用する教科書の分析も行うことで、どのような授業内容が実施可能であるか、「実用」レベルまで到達するには何が課題なのか、認識の共有を図る。
- ③ 習熟レベルや意欲の高い学生にはより学習を進ませるために、英語は1年次1期から、その他言語は2年次からの習熟度別クラス編成の可能性を探る。
- ④ 副専攻語学は1、2年次に履修するだけでは「実用」のレベルにまで達することは到底できない。従って、3年次に当たる上級クラスの必修化、或いは少なくとも通年で1科目以上は受講させるべく方策を探る。その場合単純計算ではあるが、学習時間は初級から上級まで合計で210時間以上を確保できる。
- ⑤ 副専攻語学を対象とする短期研修への参加をさらに推奨する方策を探る。言語を運用し文化に触れるためには現地へ行くことが最も望ましいからである。ただ、現状では、中国語とフランス語の研修のみ実施が可能であり、学科がなくとも、何らかの形で副専攻語学の研修が可能となるシステムの構築を探る。あるいは、専攻語学の研修中に一部副専攻語学の研修も組み入れられないか。例えば研修先をカナダとすれば英語とフランス語、シンガポールで中国語と英語の研修を企画する等の可能性の有無を検討する。
- ⑥ 専攻語学と副専攻語学の有機的関連性を高める。小稿では副専攻語学の重要性について論述してきた。履修者には出来る限り深く広く時間をかけて副専攻語学を学んでほしいが、専攻語学の重要性と比重の高さを無視することは出来ない。限られた時間の中で二つの言語を機能的に学ぶために、副専攻語学の教材の中に専攻語学と関係の深い内容を組み込めないだろうか。例えばフランス学科と中国語学科の学生は副専攻語学として英語を学んでいるが、その授業の中でそれぞれ背景知識を活用し、パリや北京の都市の成り立ち、ルーブル宮殿や万里の長城の紹介、ナポレオンや孔子

の略伝などをテーマとする英語の教材を使用することはできないか模索する。

⑦ 名外大では、留学生等の協力を得て母語話者と自由に会話する場として「ランゲージラウンジ」を設けている。副専攻語学を対象とするランゲージラウンジの運用を考えたい。

こうした議論を進めるためには、英語を含めた全副専攻語学の担当者による話し合いの場を持つことが不可欠であり急務だと考える。名外大の副専攻語学の現状を知った今、各言語の担当者は速やかに問題意識を共有せねばならず、それはまた副専攻語学の教育システム構築の出発点となるだろう。副専攻語学教育は勉強の仕方を教える場やこつこつと積み重ねる学習に取り組む場を提供する好機と捉えることもできる。大学でのリメディアル教育の1つとしても機能することが期待できるのではないだろうか。

## おわりに

多様な学習動機と多彩な教学方法が混在するからこそ、名外大外国語学部の全学生が必須科目とする副専攻語学の存在意義が有る。個々の学生は、それぞれ多様な動機に従って副専攻語学を選択し履修している。学習動機が異なれば、言語ごとに授業の重点、教科書、教授方法が異なるのは当然である。

だが、名外大の副専攻語学として、どの言語を選ぶ学生も、入学時には選択した言語の「実用能力」を獲得したいと考えている。大学側もまた、副専攻語学の教育理念として複数の外国語を自在に使い分けるマルチリンガルの育成をうたい、この目標を達成できれば広く国際社会で活躍する際の大きな強みとなると明言している。わたしたちは既に今、みずから発したこの言葉を行動に移すべき時に臨んでいる。小稿で提案した論点をさらに検証し実行する場の構築を急ぎたい。

## 参考文献

- 小田井勝彦(2010)「全入時代に於ける大学英語教育」『専修大学外国語教育論集』38, 185-197.
- 境一三(2009)「日本におけるCEFR受容の実態と応用可能性について」『英語展望』117, 英語教育協議会出版部, 22-25.
- 佐藤文彦・三上純子(2012)「初修言語A(初級)とヨーロッパ言語共通参照枠—ドイツ語・フランス語を例に—」『外国語教育フォーラム』6, 金沢大学外国語教育研究センター, 51-61.
- 財団法人大学基準協会(2009)『新大学評価システム ガイドブック—平成23年度以降の大学評価システムの概要—』
- 只木徹(2010)「2-1-1. 全学共通教育プログラム」『名城大学英語多読プログラム報告書』10-15.
- 長畑明利(2009)「名古屋大学全学教育「英語新カリキュラム」の概要及び若干の考察」『名古屋高等教育研究』9, 5-16.
- 拝田清(2012)「日本の大学言語教育におけるCEFRの受容—現状・課題・展望」『科学研究費補助金 基盤研究B 研究プロジェクト報告書「EUおよび日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」』93-103.
- 福田浩子(2009)「日本の英語教育におけるCEFRの応用の可能性」茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』6, 25-41.
- 真嶋潤子(2010)「大学の外国語教育におけるCEFRを参照した到達度評価制度の実践—大阪大学外国語学部の事例を中心に」『外国語教育フォーラム』4, 2-12.
- 吉島茂他翻訳(2001)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠』朝日出版社.
- 鷺巣由美子(2009)「国士舘大学における到達レベルと外国語ポートフォリオヨーロッパの言語共通参照枠(CEFR)とポートフォリオ(ELP)を参考にして」『外国語外国文化研究』国士舘大学外国語外国文化研究会, 19, 1-28.

## 【別表 副専攻語学履修者数(2012年度Ⅱ期)】

科目名	受講者数	科目名	受講者数
英語A-2(初級)	129	英語A-6(上級)	3
英語B-2(初級)	130	英語B-6(上級)	6
ドイツ語A-2(初級)	85	ドイツ語A-6(上級)	5
ドイツ語B-2(初級)	78	ドイツ語B-6(上級)	8
フランス語A-2(初級)	82	フランス語A-6(上級)	4
フランス語B-2(初級)	82	フランス語B-6(上級)	6
スペイン語A-2(初級)	139	スペイン語A-6(上級)	7
スペイン語B-2(初級)	146	スペイン語B-6(上級)	6
ポルトガル語A-2(初級)	26	ポルトガル語A-6(上級)	4
ポルトガル語B-2(初級)	26	ポルトガル語B-6(上級)	0
中国語A-2(初級)	197	中国語A-6(上級)	37
中国語B-2(初級)	188	中国語B-6(上級)	50
英語A-4(中級)	123	中国語C-6(上級)	14
英語B-4(中級)	124		
ドイツ語A-4(中級)	48		
ドイツ語B-4(中級)	41		
フランス語A-4(中級)	87		
フランス語B-4(中級)	78		
スペイン語A-4(中級)	70		
スペイン語B-4(中級)	65		
ポルトガル語A-4(中級)	11		
ポルトガル語B-4(中級)	11		
中国語A-4(中級)	192		
中国語B-4(中級)	194		

i 文部科学省2008『中学校学習指導要領解説外国語編』p65, 『高等学校指導要領解説外国語篇 英語篇』p32.

ii 2013年2月10日現在。http://www.nagoyagaidai.com/manabi/languages/index.html.

- iii 英語・フランス語・中国語・ドイツ語・スペイン語・ポルトガル語が副専攻語学、イタリア語・韓国語はエリアランゲージとしての言語。
- iv 中国語の場合は初級から上級A、B、Cまで全科目を修すると、学習時間は合計210回、315時間になる。
- v 竹島金吾監修、尹景春・竹島毅著『最新2訂版 中国語はじめの一歩』白水社2012年。
- vi 塚本慶一監修・劉穎著『2年生のコミュニケーション中国語』白水社2002年。
- vii 前掲『中国語 はじめの一歩』参照。
- viii 同上。
- ix 日本中国語検定協会ホームページ <http://www.chuken.g.jp/tcp/grade.html> (2013年2月20日現在)。
- x 第74回中国語検定試験4級(筆記)第5問参照。
- xi 内田慶市・奥村佳代子・張軼欧著『中国語への道一浅きより深きへー』【準中級編】金星社2009年初版。
- xii 藤田裕二『新東京一歩り、初飛行』駿河台出版社2004年。
- xiii Guy Capelle『Taxil!』Hachette 2003年。
- xiv APEF ホームページ <http://apefdapf.org/> (2013年2月1日現在)。